

## [Our Project] ニビルと地球との衝突回避に関する論文

論文作成開始日 : 2010年11月05日

論文作成完了日 : 2010年11月17日

論文作成者 : 洲崎 仁志

### 1. 概要

私、洲崎仁志は、ニビルと地球との衝突回避を行った。それを表現の自由等に基づき、論文という形で表現するものである。

### 2. 前提

(1) 2006年9月の段階では、ニビルと地球とが衝突する危機にあった事。

(2) ニビルは太陽系の惑星である。

### 3. 対策

A案 : ニビルを太陽系の軌道に乗せる事。

B案 : ニビルを太陽系から離脱させる事。

アメリカでは、核兵器で爆発させる案が検討されたようであるが、ニビルには生命体が存在している理由により、宇宙では認められなかったようである。

私は、A案を採用し、適用した。2006年9月の事である。

### 4. 考察

4. 1. ニビルを太陽系の軌道に乗せる事ができるのかどうか

結論から言えば、答えはイエスである。

信じがたいかもしれないが、それは私にできるからである。

宇宙は全て思考からできている事と関係がある。

そして、思考から実現できるからである。

#### 4. 2. ニビルを太陽系から離脱させる事の問題点

ニビルを太陽系から離脱させれば、ニビルは制御不能の状態になり、どの星に衝突するか分からなくなるからである。ニビルをより危険な状態にする恐れがある。従って、B案の採用はしなかったのである。

#### 4. 3. 最善策は何か

ニビルに生命体が存在するならば、ニビルと地球及びその生命体を救う最善策は、ニビルを太陽系の軌道に乗せる事。つまり、A案である。

ニビルに生命体が存在しないとしても、地球と地球の生命体を救う最善策は、ニビルを太陽系の軌道に乗せる事。つまり、A案である。

いずれにせよ、最善策はA案である。

#### 5. 問題点

ニビルの軌道は、一般的には、楕円軌道とされているが、果たして本当にそうなのか？

- ・ニビルの軌道面は、太陽系の軌道面とずれていて傾きがある。
- ・ニビルの軌道は、太陽系の軌道面と交差する。
- ・太陽系の中心の星は太陽である。
- ・ニビルが太陽系の惑星である地球と衝突する軌道にあった。

これらの事より、

私の仮説は、ニビルは楕円軌道ではなかったという事。

ニビルが楕円軌道であるならば、ニビルが地球に接近した後（地球と衝突しないとして）ニビルが来た方向に楕円軌道で戻る軌道を描くはずである。

しかし、太陽系の中心の星が太陽である事から、それは、ありえない。

それがありえる為には、太陽系の中心の星に太陽以外の星がなければならない。

しかし、地球などの惑星は太陽を中心として、軌道しており、太陽系の中心は太陽である。従って、ニビルは楕円軌道ではなかったという事になる。

それでは、ニビルはどのような軌道を描いていたかという仮説。

私の仮説では、ニビルは楕円軌道ではなく、無限大の記号（ $\infty$ ）の軌道を描いていたと推測する。

つまり、ニビルが地球に接近後（地球と衝突しないとして）楕円軌道でニビルが来た方向に戻るのではなく、そのままは通り抜けて、ニビルが来た方向から遠ざかる軌道を描き、太陽や地球から一番遠ざかった地点で、また太陽系の中心に近づいてくるとい軌道を描く。つまり、無限大の記号（ $\infty$ ）の軌道を描いていたという事になる。

それであれば、太陽系の中心の星が太陽である事と矛盾しない。

つまり、楕円軌道あるいは円軌道がねじれているような状態であったと推測する。

## 6. 問題点に対する対策

（1）ニビルの軌道を円軌道にした。

（2）ニビルの軌道を太陽系の軌道面と一致するようにした。

これは、ニビルの公転とともに、徐々に一致するようにしたので、

ニビルの公転周期が数回以上はかかる。

ニビルの公転周期が、例えば約3600年としても、2～3万年程度以上はかかる。気の遠くなるような話ではあるが、これらが、最善策である。

(この対策は、2006年9月より後の事である。)

## 7. 評価

この論文に関して、論文そのものにも当然価値はあるが、それよりも、この地球にどんな問題があり、どのような解決方法があり、どう解決策を見出し、どう解決したかという事の方がはるかに価値が高い。

そして、このニビルと地球との衝突回避に関して言えば、地球人類や地球を守ったという事であり。その価値は計り知れない。

私が、宇宙から受け取ったメッセージでは、ニビルと地球が衝突すれば、地球人類は全滅。そして、ニビルと地球との衝突により宇宙のバランスが崩れ、宇宙崩壊へと繋がっていくという事であった。

今回の衝突回避で宇宙崩壊まで回避しているのである。

地球には、人類だけでなく、動物や植物、自然、地球そのものもある。

宇宙には、無限に星も存在し、生命体も存在する。

地球レベルで見ても、この衝突回避の価値は、長い未来の年月を考慮すると、天文学的數字になるかも知れない。

例えば、人1人計算上、1億円の価値があるとして、(個人的には人の価値はもっとあると思うが)

それでも、地球上に約60億人以上が住んでいて、それだけでも単純に1億円×60億(円)の価値はある。

動物や植物、自然、生態系、地球人類の科学や財産、地球そのもの。

これらの価値まで含めると、かなりの価値がある事はお分かり頂けると思う。

宇宙レベルで見れば、その価値は天文学的数字の価値のあるものである。

ノーベル賞を永久に毎年受賞しても、足りないぐらいである。

ニビルと地球が衝突すれば、地球人類が全滅で、修復する事はできないから・・・。

## 8. 補足

### 8. 1. 地球の摂動について

ニビルと地球が衝突する状況にあった事の裏づけとして、地球の摂動が挙げられる。

摂動とは、星の揺れの事である。

地球に摂動があるという事は、太陽系のバランスが良くない状態であり、

地球の摂動の相手がニビルという星である可能性が高い事である。

太陽系の惑星の定義から冥王星が外されたという事は、地球の摂動の相手が冥王星ではない事を意味する。

つまり、冥王星よりも大きな星が地球の摂動の相手であって、それがニビルという星である可能性が高いという事である。

摂動があるという事は、磁気的にお互いに影響しあっており、磁気的に衝突の危機があったという事になる。

## 8. 2. 太陽系創造のプロセスについて

ニビルと地球との衝突の危機があったという事は、太陽系自体、完成されたものではなかったという事である。

つまり、我々は、太陽系創造のプロセスの中に存在しているという事である。

今回のニビルと地球との衝突回避により、太陽系創造のプロセスを一旦完了とする。

## 8. 3. ニビルの軌道における仮説について

ニビルの軌道についての私の仮説は、あくまでも仮説であって、

仮説が当たっているかどうかよりも、ニビルと地球との衝突の回避がメインである。

通常の間軌道や楕円軌道であれば、ニビルはもっと早く発見されているはずである。

ニビルの発見が難しいのは、ニビルの軌道が特殊な軌道を描いていたからと推測する。

この事も私の仮説である。

## 8. 4. 私の使命について

私が今回行ったニビルと地球との衝突回避は、ある意味、私の使命の一つである。

そして、私がこの使命を果たし、完了したという事である。

この論文にて、私の使命の一つ（ニビルと地球との衝突回避）を完了とする。

## 8. 5. 私が生まれてきた理由について

私がこの地球に生まれてきた理由は、この地球とニビルとの衝突を回避する事が一番の理由であったと断言する。

この地球には、さまざまな問題があるが、それらもこれから解決していかなければ

ならないであろう。

この論文を何らかの形で投稿する事によって、今後の私の人生は大きく変わるかもしれない。

それは、私が私の使命を果たした事による宇宙からのご褒美のようなものである。

#### 8. 6. その他

今回のニビルと地球との衝突回避の成功の可否は、我々地球人類が、2013年を無事迎えることができるかで分かる。

我々、地球人類が2013年を迎える事ができれば、それは大成功である。

そして、我々地球人類にとって、絶望的な状況から一転して、

最善の道を進んでいる事になる。

当論文を完成させる事ができたのは、宇宙からの助けがあるからである。

#### 9. 宇宙からのメッセージ

宇宙崩壊の危機を救ってくれた事に、宇宙は感謝します。

地球人類は2013年を迎える事ができるでしょう。

宇宙はあなたを助けています。

私が当論文を完成させた事に宇宙は大変感謝している。

これは、宇宙と私の共同作業によるものである。

## 10. 連絡先について

当論文に関する問い合わせ・連絡などについては、

次のメールアドレスをお願いします。

但し、必ず返信を約束するものではありません。

いたずらや迷惑メールは許可していません。

ourproject2010jp@gmail.com

## 11. 当論文の著作権について

当論文の著作権は、永久に、Our Project 及び 洲崎 仁志 に存在します。

当論文の著作権について、永久に、一切、放棄しません。

当論文の商業利用、二次利用、改変等、一切、禁止しています。

## 12. 最後に

この論文に関して、批判的な方がおられるかもしれないが、信じない方まで

信じていただく為に書いたのではないので、批判等は慎むようお願いします。